

414) 白い手

別れぎわ手を握り合って 見つめてた君の指先
けが
汚れない心のように まっ白で温かかった
いつの日かあの白い手に 唇づけたことあったけど
あの日々のすべてのことは いつまでも忘れはしない

白い手でまっ赤なバラを 花瓶から一輪とって
僕の手に渡したときに 赤い血がにじんできたね
傷ついたまっ白い手に 唇づけて血のひとしづく
吸い取って拭い^{ぬぐ}去った日 いつまでも忘れはしない

いたずらなバラの刺には 懐かしき思い出があり
美しきまっ白い手に 忘れえぬ恋がときめく
秋風にあの日と同じ 赤いバラ静に咲いて
ふるえてた君の指先 いつまでも忘れはしない

思い出のあの白い手に 唇づけた初恋の日よ
唇をおしあてながら 言葉なく見つめ合った日
あの日から置き去りにした 恋人よ今は何処に^{いづこ}
温かきあの白い手を いつまでも忘れはしない

白い手よあの白い手よ 思い出すあの白い手は
もどかしい初恋の日の 忘れえぬ夢のそらごと